

気持ちの変化を読み取って考えたことを話し合い、新見南吉作品のブックトークをしよう

授業者の想いとねらい

各場面ごとのごんや兵十の気持ちの変化を読み取りながら、「なぜ、こんなに悲しい物語なのだろう」という単元を貫く問いに迫る。その際、児童の発想や想いに寄り添い、それを大切にしながら必然性のある学習を展開する。なお、学習にあたっては、一人学びをもとにしつつも、みんな学びを通して、自らの考えを深めたり、広げたりするとともに、それぞれの意見がかけがえのないものであるということを実感させる。

なお、ブックトークについては、最初から児童に示すのではなく、学習を通して、最終的に、もっと、他の作品も読みたい、学んだこと、感じたことを伝えたいという想いの高まりの中から湧き上がってくることを企図した、いわば隠れたカリキュラムである。

【別紙：学びのプロセス参照】

本時で目指す子供の姿【参観の視点】

ア 「ごんの気持ちは兵十に届いたのだろうか」の問いを追究するなかで、「なぜ、こんなに悲しい物語なのだろうか」という単元を貫く問いに迫ることができる。

イ 一人学びを大切にしつつ、みんな学びで、違った意見にもふれ、自分の考えを深めたり、広げたりしている。

ウ みんな学びを通して、深めたり、広げたりしたことを、自分の考えとしてノートにまとめることができている。

エ ごんの気持ちが届いたからこそ、双方にとって悲劇であり、悲しい物語になっていることに気付いている。

参観コメント(効果が見られた点、授業者のねらいとズレた点)

- ◆目指す児童生徒の姿が見られたか？ ◆指導者と児童生徒の間に思考のズレがなかったか？を具体的にみとる。
- ◆結果、方法論に終始するのではなく、効果やズレの要因をみとり記入～何が効果的だったのか・なぜ、ズレたのか～